

本因妙の行者 日 蓮 之を得、之を記す

予が外用の師・伝教大師は生年四十二歳の御時仏立寺の大和尚に値ひ奉り、義道を落居し、生死一大事の秘法を決したまふの日、大唐の貞元二十一年大曆五月三日三大章疏を伝へ、各七面七重の口訣を以て治定したまへり。所謂玄義七面の決とは、正釈の五重列名に約して決したまふ。

一には依名判義の一面、名とは法の分位に於て施設す。体とは宰主を義と為す。宗とは所作の究竟なり、受持本因の所作に由って口に本果の究竟を唱ふ。用とは証りの体の本因本果の上の功能徳行なり。教とは誠を義と為す。誠とは本の為の迹なれば、迹は即ち有名無実・無得道なるを、実相の名題は本迹同じければ、本迹一致と思惟すべき事を大いに誠めんが為に、三種の教相を起こして種熟脱の論不論を立つる者なり。経文解釈明白たり。此くの如く文々句々の名の妙正の深義、本勝迹劣の本意を顕はし給ふなり。然りと雖も天台伝教の弘通は偏ひとえに理の上の法相、迹化の付嘱、像法の理位、観行五品の教主なれば、迹を表と為して衆を救ひ本を隠して裏に用ゆる者なり。甚深甚深、秘すべし秘すべし。

二には仏意・機情二意の一面、仏意は観行・相似を本と為し、機情は理即・名字を本と為す。何れも体用を離れず、体用は法華の心智に依って一代五時の次第浅深を開拓す。次に機情とは大通結縁の衆のために四味の調養を設けて法華に来入す。本迹二門乃至文々句々此の二意を以て分別すべき者なり。

三には四重浅深の一面、名の四重有り。一には名体無常の義、爾前の諸経諸宗なり。二には体実名仮、迹門は始覚なれば無常なり。三には名体俱実、本門は本覚なれば常住なり。四には名体不思議、是観心直達の南無妙法蓮華経なり。湛然の云はく「雖脱在現具騰本種」云云。次に体の四重とは、一に三諦隔歴の体、爾前権教なり。二には理性円融の体、迹門十四品なり。三に三千本有の体、本門十四品なり。四に自性不思議の体、我が内証の寿量品事行の一念三千なり。次に宗の四重とは、一に因果異性の宗、方便権教なり。二に因果同性の宗、是迹門なり。三に因果並常の宗、即ち本門なり。四に因果一念の宗、文に云はく「介爾も心有れば即ち三千を具す」と。是即ち末法純円、結要付嘱の妙法なり云云。次に用の四重とは、一に神通幻化の用、今経已前に明かす所の仏菩薩出仮利生の事なり。二に普現色身の用、則ち一身の中に於て十界を具する事なり。本迹一代五時に亘る。三に無作常住の用、証道八相有り、無作自在の事なり。四に一心の化用、或説己身等なり。次に教の四重とは、一に但顕隔理の教、権小なり。二には教即実理の教、迹門なり。三には自性会中の教、応仏の本門なり。四には一心法界の教、寿量品の文底の法門・自受用報身如来の真実の本門、久遠一念の南無妙法蓮華経なり。雖

脱在現具騰本種の勝劣是なり。

第四に八重浅深の一面、名の八重とは、一に名体永別の名、二に名体不離の名、三に従体流出の名、四には名体具足の名、五に本分常住の名、六に果海妙性の名、七に無相不思議の名、八に自性己々の名、乃至教は知りぬべし云云。文に任せて思惟すべきなり。

第五には還住当文の一面、四八の浅深を以て本迹勝劣を知るべし。

第六に但入己心の一面、始め大法東漸より第十の判教に至るまで、文の生起をさしおき一向に心理の勝劣に入れて正意を成すべし。謂はく、大法とは則ち行者の己心の異名なりと云云。釈の意は文義の広博を離れ、首題の理を専らにせよと釈し給ふなり。

第七に出離生死の一面、心は一代応仏の寿量品を迹と為し、内証の寿量品を本と為し、釈尊久遠名字即の身と位とに約して南無妙法蓮華經と唱へ奉る、是を出離生死の一面と名づく。本迹約身約位の釈、之を思ふべき者なり已上。

玄文畢あわんぬ

文句の七面の決とは一には依名の一面、其の義上の如し。二には感応の一面、三時弘經に亘るべし。爾前迹門、正像二千年の弘經の感応より、本門末法弘通の感応は眞実眞実勝るゝなり。三には四教の一面。四には五時の一面。五には本迹の一面。六には体用の一面。七には入己心の一面。悉く皆其の心前に同じ。智威大師の伝には、玄義・文句の両部を爾前・迹・本の各三に十重の浅深を以て口決し給へり。具には伝教大師の七面決の如し。

又摩訶止観一部には十重顕観を立てゝ是を通じ給へり。

一に待教立観。爾前本迹の三教を破して不思議実理の妙法蓮華經の観を立つ。文に云はく「えんどん円頓とは初めより実相を縁す」云云。迹門をば理具の一念三千と云ふ、脱益の法華は本迹共に迹なり。本門をば事行の一念三千と云ふ、下種の法華は独一本門なり。是を不思議実理の妙観と申すなり。

二に廢教立観。心は權教並びに迹執を捨て、本門首題の理を取って事行に用ひよとなり。

三に開教顕観。文に云はく「一切の諸法は本是もとこれ仏法、三諦の理を具するを名づけて仏法と為す。い かん云何ぞ教を除かん」云云。文の意は観行理観の一念三千を開して、名字事行の一念三千を顕はす。大師の深意、釈尊の慈悲、上行所伝の秘曲是なり。

四に会教顕観。教相の法華を捨てゝ観心の法華を信ぜよとなり。

五に住不思議顕観。文に云はく「理は造作に非ず故に天真と曰ひ、証智円明なるが故に独朗と云ふ」云云。釈の意は口唱首題の理に造作無し、今日熟脱の本迹二門を迹と為し、久遠名字の妙法を本と為す。信心強盛にして唯余念無く南無妙法蓮華經と唱へ奉れば凡身即ち仏身なり。是を天真独朗の即身成仏と名づく。

問うて曰く、前代にも此の法門を知れる人之有りや。答えて曰く、之有り。求め

て云はく、誰人ぞや。示して云はく、釈尊是なり。尋ねて云はく、仏を除き奉りて余にも之を知れる人師・論師有りや。答えて曰く、天台の云はく「天親・竜樹ないがんれいねん げちやくじぎ内鑑冷然・外適時宜」と。今日の南無妙法蓮華経は南岳・天台・妙楽・伝教の内鑑冷然・外適時宜なり。内鑑冷然・外適時宜の修行の日は本迹一致なり。有智無智を嫌はず「円頓とは初めより実相に縁す。理は造作に非ず故に天真と曰ひ、証智円明なるが故に独朗と云ふ」と云ひて、理位観行に趣かしめて利益を為し、末法の時を待つ者なり。故に天台の云はく「但当時大利益を獲るのみに非ず、後の五百歳遠く妙道うるおに霑つたなはん」云云。天台・章安・妙楽・伝教等の大聖は、内証は本迹勝劣、外用は本迹一致なり。其の故は教相も観心も相似・観行解了の人師、時機は像法なり。付嘱またも亦妄りに余人に授く、御身も亦迹化の衆たる観音・妙音・文殊・薬王等の化身なり。今末法は本化さつたの薩埵さつたたる上行等の出世の境、本門流宣の時剋なり。何ぞ理観を用ひて事行を修せざらんや。予が所存は内証外用共に本迹勝劣なり。若し本迹一致と修行せば、本門の付嘱を失ふ物怪なり。

本迹の不同は処々に之を書す。然りと雖も宿習つたな拙つたなき者は本迹に迷倒せんか。若し本迹勝劣を知らずんば、未来の悪道最も不便なり。宿業を恥ぢず還って予を恨むべきか。我が弟子等の中にも天台・伝教の解了の理観を出でず、本迹に就きて一往勝劣・再往一致みょうぎの謬義みょうぎを存じて、自他を迷惑せしむるの条宿習の然らしむる所か。閻浮提第一の秘事たりと雖も、万年救護の為に之を記し留むる者なり。我が未来に於て予が仏法を破らんが為に、一切衆生の元品の大石、第六天の魔王、師子身中のいなむし蝗虫と成り、名を日蓮に仮りて、本迹一致と云ふ邪義を申し出して、多くの衆生まさを当に悪道に引きいるべし。若し道心有らん者は彼々の邪師を捨て、宜しく予が正義に随ふべし。正義とは本迹勝劣の深秘くとうほんしゆ、具騰本種の実理なり。日蓮一期の大事なれば、弟子等にも朝な夕なに教へ、亦一期の所造等悉く此の義なり。然りと雖も迹執を出でず、或は軽んじ見惑或は蔑思惑み思惑或は癡塵沙或は迷無明ふ無明が故に日蓮が立義を用ひざるか。予が教相観心は理即名字・愚悪愚見の為なり。

日蓮は名字即の位、弟子檀那は理即の位なり。上行所伝結要付嘱の行儀は、教観判乘、皆名字即五味の主の修行なり。故に教相の次第は要用に依るべし。唯大綱を存する時は余は綱目を事とせず。彼は綱目此は大綱、彼は綱目の教相の主、此は大綱首題の主。恐らくは日蓮の行儀には天台・伝教も及ばず。何に況んや他師の行儀に於てをや。唯在世八箇年の儀式を移して、滅後末法の行儀と為す。然りと雖も仏は熟脱の教主、某は下種の法主なり。彼の一品二半は舍利弗等の為には観心たり、我等凡夫の為には教相たり。理即但妄の凡夫の為の観心は、余行に渡らざる南無妙法蓮華経是なり。是くの如き深義を知らざる僻人びやくにん出来して、予が立義は教相辺外はずれと思うべき者なり。此等は皆宿業つたなの拙つたなき修因感果の至極せるなるべし。彼の天台

大師には三千人の弟子有りて章安一人朗然たり。伝教大師は三千人の衆徒を置く、義真已後は其れ無きが如し。今以て是くの如し。数輩の弟子有るべしと雖も、疑心無く正義を伝ふる者は希にして一二の小石の如し。秘すべきの法門なり。

第六に住教顕観

七に住教非観

八に覆教顕観

九に住教用観

十に住観用教なり。

此の五重は上の五重の如く思惟すべし。

問うて云はく、本迹殊なりと雖も不思議一なり。本迹の教に於て別して不思議の観理を顕はすが故にと云云。機情に約すれば本迹に於て久近の異なり有るべし。是一往の浅義なり。内証に約して之を論ずれば勝劣有るべからず、再往の深義は不思議一と云云。如何が意得べけんや。答へて云はく、住教顕観は煩惱即菩提、住教非観は法性寂然、覆教顕観は名字判教、住教用観は不思議一、住観用教は以顕妙円と申す大事是なり。教観不思議天然本性の処に、独一法界の妙観を立つ。是を不思議の本迹勝劣と云ふ。亦絶待不思議の内証、不可得言語道断の勝劣は、天台・妙楽・伝教の残したまふ所の、我が家の秘密、観心直達の勝劣なり。迹と云ふ名は有りと雖も、有名無実・本無今有の迹門なり。実に不思議の妙法は唯寿命品に限る、故に不思議一と釈するなり。迹門の妙法蓮華經の題号は、本門に似たりと雖も義理天地を隔つ、成仏も亦水火の不同なり。久遠名字の妙法蓮華經の朽木書きなる故を顕はさんが為に一と釈すなり。末学等疑網を残すこと勿れ。日蓮靈山会上多宝塔中に於て、^{まのあた}親り釈尊より直授し奉る秘法なり。甚深甚深、秘すべし秘すべし、伝ふべし伝ふべし。

摩訶止観七面の口決とは、依名判義、附文元意、寂照一相、教行証、六九二識、絶諸思量、出離生死の一面なり已上。伝教大師云はく「一切の諸法は本より已来、不生不滅・性相凝然たり。釈迦は口を閉ぢ身子は言を絶す」云云。是は迹門、天台止観の内証なり。本門日蓮の止観は、釈迦は口を開き文殊は言語す。迹門不思議不可説、本門不思議可説の証拠の釈是なり。

又三大部に於て一同十異・四同六異之有り。伝教大師仏立寺より之を^{くけつ}口決す。一同とは名同なり。十異とは、名同義異・所依異・観心異・傍正異・用教異・対機異・顕本理異・修行異・相承異・元旨異なり。

四同とは名同・義同・所依同・所顕同なり。六異とは、釈異・大綱綱目異・本末異・観心異・教内外観異・自行化他異是なり。

今要を以て之を言はゞ、迹・本・観心同名異義なり。始終本末共に、修行も覚道も時機も感応も皆勝劣なり。

此の下二十四番勝劣なり。

一に彼の本門は我が迹門。二に彼の勝は此の劣。三に彼の深義は予が浅義。四に彼の深理は此の浅理。五に彼の極位は此の浅位。六に彼の極果は此の初心。七に彼の観心は此の教相。八に彼は台星の国に出生し、此は日本国に出世す、九に彼は薬王此は上行。十に彼は解了の機を利し、此は愚悪の機を益す。十一に彼の弘通は台星所居の高嶺なり、此の弘経は日王能住の高峰なり。十二に彼は上機に教へ、此は下機に訓ゆ。十三に彼は一部を以て本尊と為し、此は七字を以て本尊と為す。十四に彼は相對開会を以て表と為し、此は絶対開会を以て表と為す。十五に彼は熟脱、此は下種。十六に彼は衆機の為に円頓者初縁実相と示し、此は万機の為に南無妙法蓮華経と勧む。十七に彼は悪口怨嫉、此は遠島流罪。十八に彼は一部を讀誦すと雖も二字を讀まざるの義之在り、此は文々句々悉く之を讀む。十九に彼は正直の妙法の名を替へて一心三觀と名づく、有りの儘の大法に非ざれば帶權の法に似たり、此は信謗彼此決定成菩提、南無妙法蓮華経と唱へ懸く。二十に彼は諸宗の謬義を粗書き顯はすと雖も未だ言説せず、此は身命を惜しまず他師の邪義を糾し三類の強敵を招く。廿一に彼は安樂普賢の説相に依り、此は勸持不輕の行相を用ゆ。廿二に彼は一部に勝劣を立て、此は一部を迹と伝ふ。廿三に彼は応仏の域を引かふ、此は寿量品の文底を用ゆ。廿四に彼は応仏昇進の自受用報身の一念三千・一心三觀、此は久遠元初の自受用報身無作本有の妙法を直ちに唱ふ。

此等の深意は迹化の衆普賢・文殊・觀音・薬王等の大菩薩にも付嘱せざる所の大事なれば知らざる所の秘法なり。況んや凡師に於てをや。

若し末法に於て本迹一致と修行し、所化等に教ふる者ならば、我が身も五逆罪を造らずして無間に墮ち、其れに隨從せん輩も阿鼻に沈まん事疑ひ無き者なり。此の書一見の人々は、理^普智^{文殊}一言の薩埵、生死絶断の際、定光覚悟の大菩薩なり。伝教の云はく「文殊の利劍を六輪に通し十二の生類を切断す。一刀^{妙法}を下して万法を勅すに、自然に由三諦を出す見聞覚知に明らかなり。此の一言の三際を示すは一言に如かず。若し未だ達せざるの者も一頌^讚を開くに三般^同同じく通知せざること無し。生^{おの}自づから一現なる、是を一言の妙旨・一教の玄義と謂ふ」云云。天台の云はく「一言三諦・刹那成道・半偈成道」云云。伝教の云はく「仏界の智は九界を境と為し、九界の智は仏界を境と為す。境智互ひに冥^{みようくん}薰して凡聖常恒なる、是を刹那成道と謂ひ、三道即三徳と解すれば諸^{たちま}悪^え儻^{しゃく}ちに真善なる、是を半偈成道と名づく」と。今会^え釈^{しゃく}して云はく、諸^え仏^{しゃく}菩薩の定光三昧も、凡聖一如の証道、刹那半偈の成道も、我が家の勝劣修行の南無妙法蓮華経の一言に撰し尽くす者なり。此の血脈を列ぬる事は、末代浅学の者の予が仮字の消息を蔑如し、天台の漢字の止觀を見て、眼目を迷はし心意を驚動し、或は仮字を漢字と成し、或は「止觀明静・前代未聞」の見^{ふけ}に耽りて本迹一致の思ひを成し、我が内証の寿量品を知らずして止觀に同じ、

但自見の僻目を本として予が立義を破失し三悪道に墮つべし。故に天台三大章疏の奥伝に^つ属けて、天台・伝教等の秘し給へる正義、生死一大事の秘法を書き顯はし奉る事は、且つは恐れ有り且つは^{はばか}憚り有り。広宣流布の日、公亭に於て応に之を披覽し奉るべし。会通を加ふる事は且つは広宣流布の為、且つは未代浅学の為なり。又天台・伝教の釈等も予が真実の本意に非ざれども、未来嬰兒の弟子等、彼を本懐かと思ふべき者か。去る文永免許の日、爾前迹門の謗法を対治し、本門の正義を立てらるれば、不日に豊年ならむと申せしかば、聞く人毎に舌を振るひ耳を^{ふさ}塞ぐ。其の時方人一人も無く、唯我^日と与我^日計りなり。

問うて云はく、寿量品文底大事と云ふ秘法如何。答へて云はく、唯密の正法なり。秘すべし秘すべし。一代応仏の^域いきをひかえたる方は、理の上の法相なれば、一部共に理の一念三千、迹の上の本門寿量ぞと得意せしむる事を、脱益の文の上と申すなり。文底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず、直達正觀・事行の一念三千の南無妙法蓮華^{これ}經是なり。権実は理^{今日の本迹の理}なり、本迹は事^{久遠本迹の事}なり。又権実は智に約し教に約す^{一代応仏の本迹。}

本迹は^{久遠の本迹}身に約し^{名字の身位}の身に約す^{名字即の位}。又雖脱在現具騰本種と云へり。釈尊久遠名字即の位の御身の修行を、末法今時の日蓮が名字即の身に移せり。「理は造作に非ざる故に天真と曰ふ。証智円明の故に独朗と云ふ」の行儀、本門立行の血脈之を注す。秘すべし秘すべし。

又日文字の口伝、産湯の口決の二箇は両大師の玄旨にあつ。本尊七箇の口伝は、七面の決に之を表す。教化弘經の七箇の伝は弘通者の大要なり。又此の血脈並びに本尊の大事は日蓮嫡々座主伝法の書、塔中相承の^{ほんじょう}稟承唯授一人の血脈なり。相構へ相構へ、秘すべし伝ふべし。

法華本門宗血脈相承事

弘安五年^{本歲}十月十一日

日 蓮 花 押